

こ　　ど　　も　　た　　ち

TEKNA

Easter 2013

「なぜ泣いているのか。誰を探しているのか」 ヨハネ福音書 20章 1 - 18 節

新約聖書に出てくる女性で有名な人と言えば、母マリアを別にして真っ先にマグダラのマリアが挙げられます。しかし、実はこの人のことはよくわかりません。注意深く聖書を調べてごらんになるとお分かりになると思いますが、ルカ以外の福音書では、マグダラのマリアは、イエス様が十字架にかけられる時とご復活の場面で出てくるのみです。また、ルカ福音書には出てくると言っても、七つの悪霊を追い出してもらった女性と一言紹介されている（ルカ 8:2）だけです。七つの悪霊とは、おそらくひどい悪霊という意味です。イエス様に重い病気を治していただいたのでしょうか。もと娼婦であったとかイエス様の足に接吻した女性とか言われますが、聖書にはそうは書いてありません。罪ある女性がイエス様の足を涙で濡らし、髪の毛でその涙をぬぐってから、足に接吻して香油を塗った（ルカ 7 章）とありますが、この女（ひと）がマグダラのマリアかどうかはわかりません。ただベタニアのマリアが、やはりイエス様の足にナルドの香油を注いだ有名な話がありますから、同じ名前なので混同されているのだと思います。はっきりしているのは、このマリアは、イエス様が好きだったということです。そうでなければ、十字架の下に行き、真っ先にお墓に行ったりはしなかったでしょう。

イエス様が十字架におかかりになった金曜日から三日目、「**週の初めの日**（つまり日曜日）、**朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは（イエス様の）墓に行った**」（20:1a）とあります。ご遺体に香油を塗るためでした。十字架は過ぎ越し祭が始まったばかりの金曜日の午後、つまり安息日である土曜日の直前の出来事でしたから、日が暮れないうちに大急ぎでお墓に納められてしまったのでしょうか。当時は日が暮れると一日が始まるのでした。それで安息日が明けた土曜日の夜、香油を整えて、日曜日の朝早く、まだ暗いうちからお墓に向かったようです。どんなにイエス様を愛して

いたとしても、死は動かし難い事実です。何もできません。涙を流しながら死を悼み、香油を塗ることぐらいしかできないのです。それがマリアにできる、せめてもの弔いでした。マリアはいてもたってもおれなかったのでしょうか、誰よりも先にお墓に向かいました。

人間にとってどうしようもない問題、最後の敵は「死」です。愛する者の死に向き合ったとき、泣くこと以外どうすることもできないのです。わたしたちは死に対してはまったく無力です。しかし、涙で何も見えなくなったそのときに、聞こえてくる声がありました。マグダラのマリアは、悲しみと無力さのどん底で、何を聞いたのでしょうか。それはイエス様の御声でした。泣き続けるマリアにこう語られたのです。「**婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか**」(20:15a)。天使と全く同じ言葉です。ご復活のイエス様の言葉は、天からの声なのです。「なぜ泣いているのか」と言われるのです。勿論理由を尋ねておられるのではありません。「もう泣かなくてもいいのだよ」と語りかけられたのです。なぜもう泣かなくてもいいのでしょうか。イエス様がそこにおられるからです。「わたしだ、わたしがあなたと共にいる」とおっしゃったのです。マリアは間違っていたのです。大事な人は、消え去ったのではなかったのです。マリアはイエス様が死に支配されたと思っていました。だから泣き続けました。しかし、イエス様は死に勝利され「復活された」のです。決定的なことが起こっていたのです。人生における最大のどうしようもない問題、最後の敵である死に、イエス様は既に打ち勝っておられたのです。

ところがそれでも、まだマリアは気づきません。ご復活のイエス様を園丁だと思って泣きじゃくりながら答えます。「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります**」(20:15c)。わたしが引き取るのだ、返してくれと言います。すると、イエス様はただ一言、「**マリア**」と声をかけられました。今まで幾度となく聞いてきたアラム語のアクセントでした。「マリアム」となつかしい響きでした。その一言で十分でした。分かったのです。その声で分かったのです。彼女は振り向いて、「ラボニ」すなわち「**わたしの先生**」と叫びます。アラム語でラボニは、「ラビ、先生」と「アニー、わたしの」がひっついて、わたしの先生、おそらくわたしの**大好きな**先生という感じです。そしてイエス様にすがりついたのです。ものすごく嬉しかったのでしょうか。この時代の女性は屋外で男に抱きついたりはしません。理性を失うほどの喜びだったのです。

もう泣かなくてよいのです。笑顔が戻りました。悲しみが去って喜びが戻りました。

マリアが強くなったのではありません。依然として無力です。彼女自身は何も変わってはいません。しかし、もはや泣くことはないのです。主が共におられるのですから。実はマリアが気づいていなかっただけで、絶望の中にいた時から、嘆き悲しんでいた時から、ご復活の主は既に共にいてくださったのです。それがお甦りの朝、最初に起こったことです。そのことをマリアはやっと知ったのです。イエス様を愛していたマリアでさえ、目の前におられるにもかかわらず気が付きませんでした。

振り返ったマリアに対して、イエス様は言われました。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。」以前の訳では「わたしに触ってはいけない」となっておりましたが、これでは、マリアはイエス様にすがりついてはいないこととなります。カトリック教会は、司祭の独身制を採っております。教職者は女性と体が接触することは避けましたから、イエス様が女性に抱きつかれるはずがないということで、ラテン語の聖書（ウルガータ）はそのように訳していますが、もとのギリシア語では「すがりついているのはやめなさい」と書かれています。いつまでも、見える姿で現れたイエス様にしがみついていたはいけないということです。なぜでしょうか。「まだ父のもとへ上っていないのだから」とおっしゃいます。救い主は父のもとに上って、見えざるお方とされるのです。目で見たり、手で触れたりすることのできないお方とされるのです。マリアは、それを理解し受け入れる必要がありました。「なぜ泣いているのか」とやさしく問いかけられ、もはや泣く必要がなくなったのは、死んだと思っていたイエス様が生きておられたからだけではありません。元の状態に一時的に戻ったということでもないのです。そうではなくてイエス様が死に打ち勝たれたから、もはや泣く必要がないのです。その御方が「一緒にいてくださる」からなのです。「わたしだ、わたしがいる」とおっしゃっているからです。

このマリアに起こったことは、わたしたちの人生にも起こっています。マリアとわたしたちとではイエス様との親しさは違いますが、同じように、ご復活の主は既に共にいてくださるのです。ところが、そこにおられるにもかかわらず、園丁にしか見えない。「主がどこにおられるのか、わたしにはわかりません」(20:13)というマリアのセリフは、わたしたちのセリフでもあります。しかし、イエス様は確かに共にいてくださるのです。そして語りかけてくださいます。「わたしだ、わたしがいる」と。

イエス・キリストのご復活の出来事は、どこか遠い国のずっと昔の出来事ではありません。今生きているわたしたち自身の存在に深くかかわる出来事です。イエス様はお聞きになります。誰を捜しているのかと。わたしたちは誰を捜しているのでしょうか

か。自分を幸せにしてくれる人、自分の夢をかなえてくれる人です。それが信仰だと思っています。神を発見して豊かな人生を送ろう。幸せになろう。しかし、そうではないのです。マリアにとっては大事な先生、愛するイエス様です。わたしたちが捜すべきなのは、生きる時も死ぬ時も、共にいてお前を愛しているよと言ってくださる神です。死に打ち勝って、今わたしの傍にいてくださるお方です。

目に見えるお方として、イエス様にお会いすることはできません。もはやわたしたちが目で見、手で触ることのできるお方ではありません。しかし、死に勝利されたイエス様は確かに今も生きておられるのです。マリアの言う「わたしは主を見ました」(20:18)ということ信じればいいのです。ご復活のイエス様に最初に出会ったのは、泣くことしかできなかった無力な女性でした。わたしたちも、たとえ無力なものであっても、もはや泣くだけの者ではないこと、ただ一人、孤独に生きる者ではないことを、聖餐においてパンが裂かれ杯が分かち合われる交わりにおいて、主ご自身が明らかにして下さいます。イエス様は生きておられます。ご復活を、ご一緒に心から喜び祝おうではありませんか。

みなさん、イースター、おめでとうございます。イエス・キリストは甦られました。キリスト復活。まさに復活。主はわれらと共に。ハレルーヤ！

祈ります。

父なる神、この地上を歩まれたナザレのイエス様が、神の御子、救い主キリストであることを、おそらく最初に理解したのはマグダラのマリアであったでしょう。主を愛する人だけが感じ取れる真実があります。わたしたちがイエス様のご復活を喜ぶことを感謝します。イエス様の父である神が、わたしたちの父でもあることを、また、イエス様がわたしたちを兄弟と呼んでくださることを感謝します。イエス様と共に、これからの人生を歩ませてください。

主のみ名によって願い、祈ります。アーメン。

久下倫生、テクナへの原稿、2013年復活日